



下記の図書が「天気」編集委員会に寄贈されましたのでお知らせ致します。

- (1) 積算資料 雪寒対策特集 '90/'91 (財)経済調査会発行
 (2) 原見敬二著：「古事記」と気象 神戸新聞総合出版センター
 (編集委員会)

訂 正

巻・号	頁	行	誤	正
38. 1	46	左・ 2	+0.0004	-0.04
	47	右・21	科学研究所	科学技術研究所
	47	右・33	(h sinφ…	× (h sinφ…

編集後記：「現代用語の基礎知識」編集部が昨年末に選んだ「1990年日本新語・流行語大賞」の特別賞に「気象観測史上（はじめての・・・）」が選ばれたそうである。この賞は「1年の間に発生した様々な言葉の中で、軽妙に世相を衝いた表現とニュアンスをもって、広く大衆の目、口、耳をにぎわせた新語・流行語を選ぶとともに、その新語・流行語の発生により深くかかわった人物・団体を顕彰する」賞だそうである。

具体的に上記・・・に何が対応するのか明かでないが、察するところではその最たるものは、「温暖」や「暖かさ」であったのではないと思われる。昨年は地球温暖化が大問題として全球的に浸透した年でもあったからである。そこで昨年の暖かさが温暖化の兆しかどうかなどの話題が飛び交ったわけであるから、この大賞の存在理由も判らうというものである。

しかし、気象現象を仕事や学問の対象としている人々にとって、例えばこの温暖化問題について専門外の人からいろいろと問われたときに、どう答えるべきかについて、今までに比べて深刻さが格段と深まったことは否定できない。公の機関が公表したことまでは話が出来るとして、そこから一步踏み込んだこととなると、途誰に答えに詰まってしまうことが多いのではあるまいか。判らない面が実際に極めて多い中での答え方であるから困るわけである。そして真に深刻な問題は気象の専門家の答

え方が様々でかつ矛盾し、社会的に混乱を生むことになった場合であろう。

筆者は寡聞にして、深刻な混乱の事実のあるなしを知らないが、一国の政策決定はもちろん国際的協定・条約にいたるまでその混乱が影響する可能性がなきにしもあらずであると考えてるのは行き過ぎであろうか。

「天気」は気象関係の専門誌である。「温暖化」に直接関係しないか、関係しても非常に間接的である多くの気象専門家を読者に持っている。そのような読者に対するある意味での指針となって、少なくともこの混乱の発生を起こさぬために貢献する使命があるのではないだろうか。

生意気なことを述べて恐縮ではあるが、温暖化関係の記事を読むときなどに筆者がいつも感ずることである。

(MS)

長い間「天気」の編集作業に献身的に努力された編集書記の長谷川初美さんが、都合で12月末で退職されました。本当に御苦労様でした。

1月からは新しく西沢美佐さんが書記として編集委員会に加わり、2月号の編集から全面的に担当されています。編集作業に慣れるまでは、皆様のより一層の御協力をお願い致します。

(編集委員長)